

# フランス語とイタリア語における受動使役構文について

Acerca de la construcción causativa introducida por el verbo  
matriz pasivo (Faire/Fare) en francés e italiano <sup>2)</sup>

石岡 精三  
Seizo ISHIOKA

## 0. はじめに

フランス語の例(1)とイタリア語の例(2)で観察されるように、使役構文における matrix V (Faire/Fare) が受動態で用いられた場合の文法性判断は正反対である。

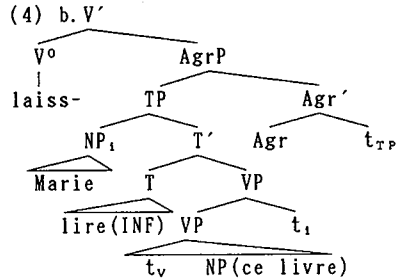
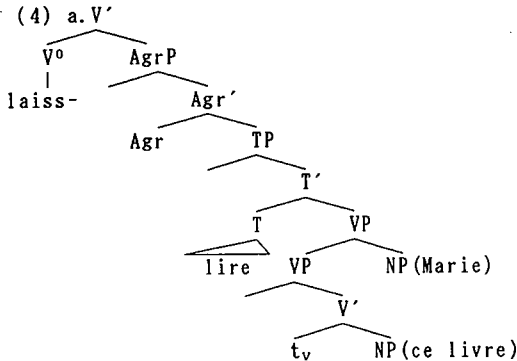
- (1) a. \*Jean a été fait travailler beaucoup (Guasti 1991:note 9)  
'Jean has been made to work a lot'  
b. \*la maison a été faite construire à Casimiro (Pearce 1990:77)  
c. \*la maison a été faite construire par Casimiro (Zubizarreta 1986:20a)  
'the house has been made to be built by Casimiro'  
d. \*Jean a été fait construire la maison  
'Jean has been made to build the house'
- (2) a. Gianni è stato fatto lavorare molto (Guasti 1991:6)  
'Jean has been made to work a lot'  
b. la macchina è stata fatta riparare a/da Gianni (同上:11)  
'the car has been made to be repaired by Gianni'  
c. Giovanni fu fatto riparare la macchina (Burzio 1986:p.232) <sup>1)</sup>  
'Giovanni was made to repair the car'

フランス語における当該構文は非文と判断される。一方、イタリア語での用例は反対に文法的である。本稿では、上の(1)と(2)の相違を説明すると考えられる論法が提示される。具体的には、受動使役構文における同一指標付け規則 (Coindexing Rule in Passive) の適用が言語、あるいは方言ごとにパラメーター化されると主張する。第1節と第2節ではそれぞれ、Faire/Fare 使役構文の構造と受動構文の一般的特性が検討される。第3節では、フランス語の Laisser 使役構文と知覚構文における受動用例が吟味される。第4節では、提案とその問題点が指摘される。

## 1. Faire/Fare 使役構文の構造

最初に、フランス語の Laisser 使役構文について考える。<sup>2)</sup> 石岡 (1992, 1993a) で主張したように、当該構文を導入する matrix V (laiss-) はイタリア語の対応構文と同様に、AgrP を下位範疇化すると考えられる。更に、主語 NP は VP に付加した位置に基底生成されると仮定する。結果として、例えば (3a-b) の基底構造は次の (4a) となる (tv は移動により空となった V の痕跡)。

- (3) a. Jean a laissé Marie lire ce livre  
 b. Jean a laissé lire ce livre à Marie 'Jean let Marie read that book'



(4a)において、embd.V は基底生成された位置にある主語 NP (Marie) に格を付与しない。embd.V が embd.T 位置へ移動によって不定法形態が形成され、その時点で V-Movement を停止すると考える ([-Finite] CP 中の Agr と同様に、この場合の Agr はその sister 要素である TP を L 標示しないと考えられる)。embd.T は語彙的要素が付加移動しているため、その sister である VP を L 標示する。つまり、当該 VP は「障壁」(Barrier, bar. と略記)とならない。結果として、主語 NP (Marie) の embd.SPEC (T) 位置への移動が可能となる。しかし、この位置は格が付与される位置でない。また、matrix V (laiss-) が当該 SPEC (T) 位置へ移動した主語に格を付与することはない。embd.Agr が matrix V による統率に対して Relativized Minimality bar. (RMB) を構成し、この統率関係を許容しないためである (embd.Agr がその sister である TP を L 標示しないと考えられるため、当該 TP は同時に bar. となる)。<sup>3)</sup> embd.TP が bar. となるため、主語 NP (Marie) の embd.SPEC (Agr) への移動も排除される。それでは、主語 NP (Marie) はどのようなプロセスによって格 (対格) を付与されるのか。

ここで、embd.TP 全体の embd.SPEC (Agr) 位置への移動 (Vacuous Movement) を仮定する。その場合の構造として、(4b) が考えられる (cf. Haverkort 1992)。既に述べたように、(4a) 中の embd.TP は bar. を構成する。しかしながら、(4b) において、embd.SPEC (Agr) 位置へ移動した TP は、L 標示定義 (5) と SPEC-HEAD Agreement の適用により、bar. を構成することはない。

(5) Definition of L-Marking:

Where  $\alpha$  is a lexical category,  $\alpha$  L-marks  $\beta$  iff  $\beta$  agrees with the head of  $\gamma$  that is  $\theta$ -governed by  $\alpha$ . (Chomsky 1986:p.24) <sup>4)</sup>

$\alpha$  と  $\beta$  はそれぞれ、matrix V (laiss-) と embd.TP に対応する。 $\gamma$  は embd.AgrP に対応する。SPEC-HEAD Agreement の適用により、 $\gamma$  (embd.AgrP) の主要部 (Agr) はその SPEC 位置へ移動した embd.TP に一致する。 $\alpha$  (matrix V (laiss-)) はその sister である AgrP を  $\theta$  統率する

(同時に L 標示する)。よって、matrix V は embd.TP をも L 標示することになる (embd.TP ≠ bar.)。同時に、embd.TP 移動により、embd.Agr が matrix V による統率に対する RMB を構成しないことになる (embd.Agr は、embd.SPEC (T) 位置へ移動した主語 NP (Marie) を c 統御しない)。結果として、embd.SPEC (T) 位置へ移動した主語 NP (Marie) は matrix V (lais-) によって統率され、適切に対格 (Acc) を付与される (これにより、(3a) が生成される)。<sup>5)</sup>

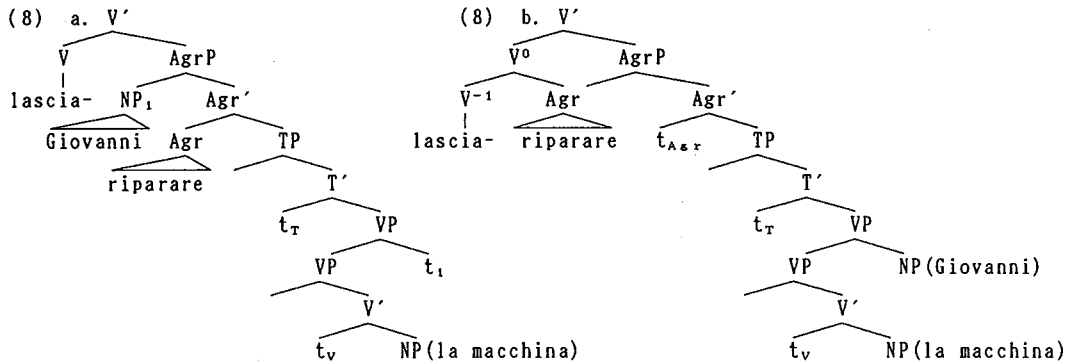
(3b) はどのように生成されるのであろうか。embd.V (tv) の sister である NP (ce livre) と主語 NP (Marie) の相対的位置に留意されたい。主語 NP (Marie) は基底生成された位置 (VP に右方付加した位置) にとどまっていると考えられる。つまり、(3b) の基底構造は、embd.AgrP 中の主語 NP が基底生成された位置にあって移動していない点を除き (4b) と同じである。ここで、主語 NP (Marie) に格を付与する要素が問題となる。embd.V が基底生成された位置にある主語 NP に格を付与することはない。matrix V (lais-) は、embd.T が RMB を構成するため、基底生成された位置にとどまっている主語 NP を統率しない (主語 NP に格を付与することもない)。(4b) において、matrix V (lais-) は embd.T 位置にある不定法形態の動詞を統率する。この統率関係によって生成された [matrix V + INF] は一種の合成動詞を形成すると考える (Reed (1991a-b, 19-92) と同様に、この合成動詞を動詞統率連鎖 (Verbal Government Chain) と呼び、VGCh と略記)。この VGCh は、Case Array ( \_\_\_ Acc (Dat) ) をもつと考えられる。結果として、NP (ce livre) と主語 NP (Marie) はそれぞれ、VGCh から Acc と Dat を付与されることになる。Faire 使役構文は、(3b) の Laisser 構文と同じ挙動を示す。Faire 使役構文の用例である (6) は、(3a-b) の Laisser 構文の場合と異なり、VGCh の形成が義務的に発動すると仮定することにより説明可能である (この場合の VGCh も Case Array ( \_\_\_ Acc (Dat) ) をもつ)。

- (6) a. \*Jean a fait Marie lire ce livre  
 b. Jean a fait lire ce livre à Marie 'Jean made Marie read that book'

それでは、次の (7) のようなイタリア語の Fare 使役構文はどのような構造であろうか。フランス語の場合と異なり、イタリア語の [ $\pm$ Finite] CP (AgrP) の V は Agr 位置まで主要部移動すると考えられる (cf. Belletti 1990)。よって、Fare 使役構文に対して (4b) に類似する構造を仮

- (7) a. Maria ha fatto riparare la macchina a Giovanni (Burzio 1986:p.228)  
 b. \*Maria ha fatto Giovanni riparare la macchina  
     'Maria had Giovanni repair the car'  
 c. Maria ha lasciato riparare la macchina a Giovanni  
 d. ?Maria ha lasciato Giovanni riparare la macchina <sup>6)</sup>  
 e. \*Maria ha lasciato riparare Giovanni la macchina  
     'Maria let Giovanni repair the car'

定することはできない。このことは Lasciare 使役構文についても同様である (つまり、Fare 使役構文と Lasciare 使役構文の相違点を明らかにする必要が生ずる)。本稿では、Lasciare 使役構文 (と知覚構文) に対して次の (8a, b) を仮定する。



embd. AgrP 中の主語 NP は VP に付加した位置に基底生成される。embd. AgrP において、V は T を経由して Agr 位置まで移動する (embd. T 位置において不定法形態が生成される)。(8a) の構造において、基底生成された位置にある主語 NP (Giovanni) には格が付与されない。Case Filter の要請から、この主語 NP は格が付与される位置 (embd. SPEC (Agr) ) へ移動する (フランス語の場合と同様に、matrix V (lascia-) は Case Array ( \_\_\_ Acc) をもつと考えられる。また、embd. TP は bar. を形成しないと考えられる)。つまり、主語 NP は embd. SPEC (Agr) 位置で matrix V (lascia-) から Acc を付与される (embd. V ( $t_v$ ) は目的語 NP (la macchina) に Acc を付与する)。

(8b) の構造において、embd. AgrP 中の V は T を経由して Agr 位置まで移動する。更に、S 構造の段階で、不定法形態が移動した embd. Agr<sup>0</sup> が matrix V<sup>0</sup> (lascia-) の MSS (Morphologically Selected Slot) 位置へ移動する (cf. Guasti 1991, Roberts 1991)。この移動により、一種の複合動詞 [matrix V<sup>0</sup> (lascia-) + INF] が形成される。この複合動詞 (Complex Verb, CV) は、フランス語の VGCh と同様の Case Array ( \_\_\_ Acc (Dat) ) をもつと考えられる。CV と VGCh による格付与に関しては、次の (9) が仮定される。

- (9) a. Case assignment is optional  
 b. When a verb assigns Case, the entire Case Array must be assigned.  
 c. A CV (or a VGCh) loses its property of assigning a structural Case when the Case in question has already been assigned by an embd. V.  
 d. Dat cannot be assigned to an element base-generated as V's sister.

(9b) は、Case Array ( \_\_\_ Acc (Dat) ) における Dat 付与が Acc 付与を前提することを表す。(9c) は、不定法形態となる embd. V が対格を付与した場合、CV (あるいは VGCh) による Acc 付与機能が許容されない意味である (結果として、CV (あるいは VGCh) による Dat 付与が排除される)。主語 NP (Giovanni) が Case Filter の要請から embd. SPEC (Agr) 位置へ移動したとしてみよう。その場合、CV がこの主語 NP (Giovanni) に Acc を付与可能である。一方、CV は embd. V ( $t_v$ ) の目的語 NP (la macchina) に Dat を付与する。しかしながら、この Dat 付与は、V ( $t_v$ )

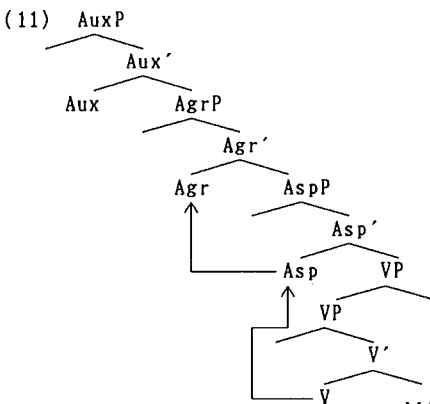
の sister 位置に生成される要素への Dat 付与を許容しない (9d) によって排除される。embd.V (tv) がその sister である NP (la macchina) に Acc を付与した場合に、CV が主語 NP に格を付与することはない (9b)。これにより、(7e) の非文法性が説明される。一方、文法的と判断される (7c) は、CV が目的語 NP と主語 NP にそれぞれ、Acc と Dat を付与可能であることから説明される。<sup>7)</sup> Lasciare 使役構文と異なり、Fare 使役構文では CV (複合動詞) の形成が義務的に発動すると考えられる (つまり、(7a) と (7c) は同様の派生構造をもつことになり、主語 NP と目的語 NP は Case Filter の要請を満たす)。これにより、(7a) と (7b) の相違が説明される。

## 2. 受動構文について

次のフランス語とイタリア語の例 (10) でも明らかなように、受動構文における過去分詞は性・数に関して matrix SPEC (Agr) 位置へ移動した主語 NP と一致しなければならない。

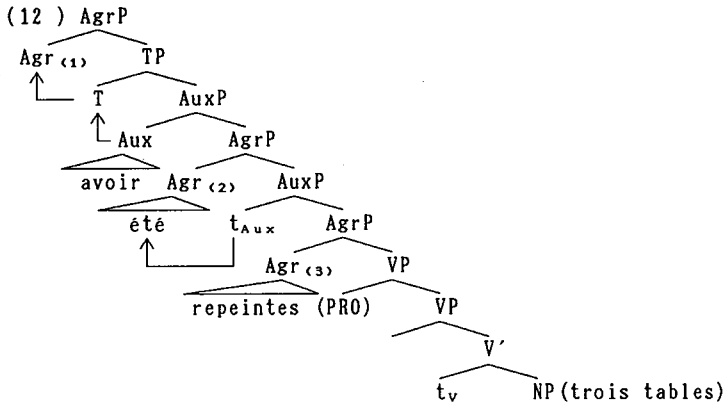
- (10) a. trois tables ont été repeintes (par Jean) (Ouhalla 1991:p.99)  
 b. \*trois tables ont été repeint (par Jean)  
 'three tables have been repaired (by Jean)'  
 c. la casa è stata descritta (Cortés 1992:p.84)  
 d. \*la casa è stato descritto 'the house has been described'

過去分詞を伴う助動詞範疇 (AuxP) が次の (11) の構造をもつと考える (cf. Belletti 1990)。



Aspect (Asp) 位置へ移動した V は過去分詞として実現される。更に、V の移動によって生成した Asp の複合体は Agr 位置へ移動する。以上の前提の下で、例えば (10a) の構造として次の (12) が仮定される (AspP の表示は省略する)。一般的に、受動構文における V はその対格 (Acc) 付与機能を失うと考えられている (Case-Absorption)。<sup>8)</sup> その結果、Case Filter の要請から目的語 NP (trois tables, la casa) は格が付与される位置 (SPEC (Agr<sub>i</sub>)) へ移動することになる。

(10) において、過去分詞が SPEC (Agr<sub>i</sub>) 位置へ移動する目的語 NP (trois tables, la casa) と性・数に関して一致する事象はどのように説明されるか。



本稿では、Kayne (1989) と Ouhalla (1991) の主張に従う。つまり、受動構文における NP 移動は、受動の Aux によって下位範疇化される AgrP の SPEC 位置を経由することによって発動すると仮定する (SPEC-HEAD Agreement)。また、当該 SPEC (Agr) 位置を経由する要素が目的語要素に限定されることは、次の (13) で示されるように、受動の Aux によって下位範疇化される AgrP の主要部と embd.V の sister 位置にある目的語 NP が同一指標の関係にあると考えることにより導かれる。

(13) Coindexing Rule in Passive (A) (CRP (A)) :

Coindex a passive Agr with the sister NP of the head of a VP subcategorized by the Agr in question.

3. Laisser 使役構文と知覚構文における matrix V の受動化

Burzio (1986) は、フランス語における Laisser/Faire 使役構文の matrix V の受動化は許容されないが、知覚構文の場合は基本的に許容されると指摘する。<sup>9)</sup>しかしながら、次の (14) の例からも明らかのように、この Burzio (1986) の指摘には問題がある。

(14) a. \*Jean sera laissé manger ce gâteau (Kayne 1975:p.274)

'Jean will be allowed to eat that cake'

b. Marie a été laissé rencontrer le général (Rouveret and Vergnaud 1980:note 24)

'Marie was allowed to meet the general'

c. ?Marie a été laissé partir (Quicoli 1980:9)

'Marie was allowed to leave'

d. ?Jean a été vu enterrer ses livres (Kayne 1975:p.274)

'Jean was seen to bury his books under the ground'

e. \*le sophiste était souvent vu flatter les puissants

(Rouveret and Vergnaud 1980:note 24)

'the sophist was often seen to flatter the mighty ones'

f. ?il était souvent entendu soutenir des idées opposés devant des publics

différents (Rouveret and Vergnaud 1980:note 24)

'he was often heard to defend opposite views before different audiences'

g. ?elle a été entendu chanter cette chanson (Kayne 1975:p.274)

'she was heard to sing that song'

(14) の例は, embd.AgrP 中の主語 NP が matrix SPEC (Agr) 位置へ移動したものである。(14a, b, c) で観察されるように, Laisser 使役構文での受動化が許容される例が存在する。また, (14e) のように, 知覚構文での受動化が排除される場合もある。本稿では, Laisser 使役構文と知覚構文が類似の挙動を示すと考えてきた。しかしながら, (14) の例は, 少なくとも Laisser 使役構文と Voir 知覚構文における embd.AgrP 中の主語 NP の移動に関して両者の間に相違点が存在することを示す。ここで, Kayne (1975) と Rouveret and Vergaud (1980, R&V と略記) の挙げる例の文法性判断が, Laisser 使役構文と Voir 知覚構文のそれぞれで反対になっている点に留意されたい。この文法性判断の相違は, 方言上の相違と考えられる (Kayne (1975) と R&V (1980) が属すると考えられる方言をそれぞれ, K 方言と R&V 方言と呼ぶことにする)。次の (15) は, 当該方言グループにおける本稿の (1) の例と (14) の例に対する文法性判断の一覧である。

(15)	Faire 構文	Laisser 構文	Voire 構文	Entendre 構文
K 方言	*	*	?(ok)	?(ok)
R&V 方言	*	ok	*	?(ok)

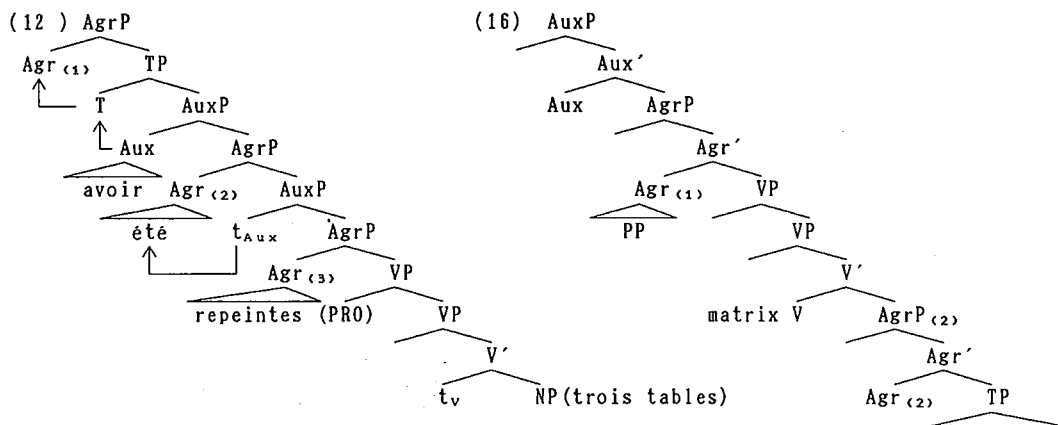
(15) における分布上の相違はどのように説明されるであろうか (詳細は, 第4節で検討する)。本稿の第1節で仮定したように, Laisser 使役構文と知覚構文は同じ構造をもつ。<sup>10)</sup> (4b) で示したように, これらの構文において主語 NP は基底生成された位置, あるいは embd.SPEC (Agr) 位置へ移動したTP の SPEC 位置で格を付与される (一方, Faire 使役構文における主語 NP は前者の位置でのみ格を付与される)。(15) で観察される相違が派生構造の相違に起因すると仮定してみよう。具体的には, 何らかの要因によって (4b) の構造において主語 NP が基底生成された位置にとどまっている場合に matrix V の受動化が阻止されると考えてみよう。その場合, 両方言における Laisser 使役構文と知覚構文の例は共に文法的と予測されることになる。明らかに, この予測は事実と反する。また, Laisser 使役構文と知覚構文の構造が方言ごとに異なっていると考えることもできないであろう (同様に, NP に対する格付与の相違を仮定することもできない)。(15) で観察される相違は各方言における構造上の要因に還元することはできないと考えられる。

上の考察が妥当するならば, (15) の相違は matrix V の受動化に関する何らかの規則が存在し, その規則の適用が方言ごとにパラメータ化されていると推定される。第4節では, この規則の特定がなされる。

#### 4. 提案とその問題点

前述のように, 受動構文において, NP 移動する要素は 受動の Aux によって下位範疇化される AgrP の SPEC 位置を経由して移動すると仮定される。また, 受動の Aux によって下位範疇化される AgrP の主要部は embd.V の sister 位置にある要素と同一指標の関係にある (cf. GRP (A))。つまり, (12) の構造における Agr<sub>(s)</sub> と NP (trois tables) は同一の指標を付与されている。これにより, 受動の Agr の SPEC 位置を経由する要素は embd.V の sister 位置に生成される NP 要

素に限定される（つまり，受動構文において，matrix SPEC (Agr) 位置へ移動した NP 要素と過去分詞との性・数に関する一致現象が説明される）。本稿では，Faire(Fare)/Laisser(Lasciare) 構文と知覚構文の matrix V が共に AgrP を下位範疇化すると仮定されている。ここで，これらの構文の matrix V が受動化された例の構造 (16) と (12) の構造を比較する（便宜上，(12) を再掲する）。



(12) における Agr<sub>(3)</sub> と NP (trois tables) の相対関係は，(16) において過去分詞 (PP) が位置する Agr と matrix V によって下位範疇化される AgrP のそれに等しい。ここで，(13) の CRP (A) を次の (17) の形に拡張する。

- (17) Coindexing Rule in Passive (B) (CRP (B)) :
- Coindex a passive Agr with the sister element to the head of a maximal projection subcategorized by the Agr in question.<sup>11)</sup>

つまり，(16) 中の PP が位置する Agr<sub>(1)</sub> と matrix V によって下位範疇化される AgrP は同一指標の関係にある。matrix V の受動化において，当該 V に下位範疇化される AgrP 内部に生成される NP が matrix SPEC (Agr) 位置へ移動する。しかしながら，この移動は次の i-within-i 条件によって排除される（つまり，この場合の受動化一般が排除されることになる）。

- (18) i-within-i Condition:
- $$* [ \gamma_1 \dots \delta_1 \dots ]$$

これは以下のように説明されるであろう。(16) において，AgrP<sub>(2)</sub> 内部に生成される NP 要素は SPEC (Agr<sub>(1)</sub>) を経由して matrix SPEC (Agr) 位置へ移動する。(18) の条件によって，AgrP<sub>(2)</sub>

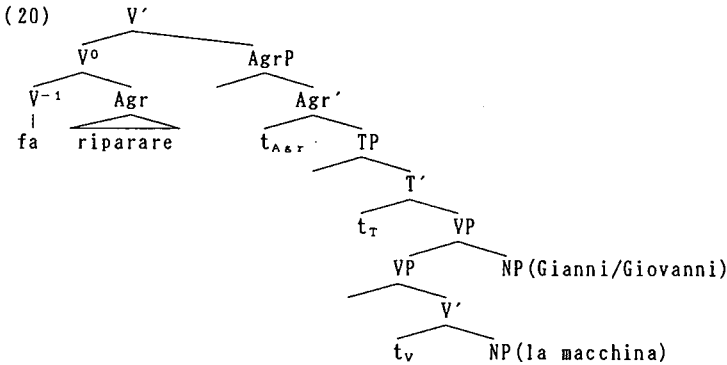


内に生成された NP は AgrP (そして Agr<sub>(1)</sub>) と同一の指標をもつことはない。つまり, matrix SPEC (Agr) 位置へ移動する NP が SPEC (Agr<sub>(1)</sub>) へ移動した段階で SPEC-HEAD Agreement に関する指標の衝突が起こる。結果として, AgrP<sub>(2)</sub> 内部に生成された NP 要素の移動, つまり, matrix V の受動化が排除されることになる。<sup>12)</sup>

この議論はフランス語の Faire 使役構文の例を適切に説明すると考えられる。しかし, 同時にイタリア語の Fare 使役構文の用例を非文法的と予測することになる。この問題は, (17) の同一指標付け規則 (CRP (B)) の適用が言語ごとにパラメーター化されると仮定することにより打開される。つまり, CRP (B) の適用が義務的であるフランス語の Faire 使役構文に対して, イタリア語における Fare 使役構文では CRP (B) の適用は随意的であると考えられる。この仮定によって, 少なくとも構造 (16) において, Agr<sub>(2)</sub> 内部に生成された NP が SPEC (Agr<sub>(1)</sub>) 位置を経由することが可能となる。また, フランス語の Laisser 使役構文においては, CRP (B) の適用が方言ごとに異なる状況を示す。例えば, K 方言における Laisser 使役構文では CRP (B) の適用が義務的である一方で, R&V 方言のそれでは適用が随意的であると考えられる。逆に, Voire 知覚構文に関しては, K 方言における当該規則の適用は随意的であり, R&V 方言では義務的と考えられる。

最後に, イタリア語の例 (2b, c) における NP (Gianni, la macchina) に対する格付与が問題となる (当該用例を (19a, b) として再掲する)。<sup>13)</sup> その構造として次の (20) が仮定される。前述のように, イタリア語の Fare 使役構文における複合動詞 (CV) の生成は義務的に発動する。

- (19) a. la macchina è stata fatta riparare a/da Gianni (Guasti 1991:11)  
       'the car has been made to be repaired by Gianni'  
       b. Giovanni fu fatto riparare la macchina (Burzio 1986:p.232)  
       'Giovanni was made to repair the car'



つまり, matrix V (fa-) が単独で AgrP 内部の NP 要素に格を付与することはない。また, 複合動詞 (CV) は Case Array ( \_\_\_ Acc (Dat) ) をもつと仮定されている。また, 一般の受動態の場合と同様に, 受動態での CV はその対格 (Acc) 付与機能を失うと考えられる (この Acc 付与機能の喪失を格付与の不適用と考える。また, (9b) は Dat 付与を排除する)。結果として, (20) におい

て CV が NP (la macchina) に格を付与することはない(また, CV が主語 NP (Giovanni) に格を付与することもない)。一方, NP (la macchina) は embd.V ( $t_v$ ) によって Acc を付与されることになる(embd.V は Case Array ( \_\_\_ Acc) をもつ)。つまり, 格を付与されない主語 NP (Giovanni) は matrix SPEC (Agr) 位置へ移動して Nom (主格) を付与される。これは, (19b) の文法性を説明するものである。

問題となるのは, (19a) の主語 NP (Gianni) に Dat が付与されるプロセスである。前述のように, CV と embd.V ( $t_v$ ) による Dat 付与は許容されない。結果として, 当該主語 NP に格を付与する要素が存在しないことになる。この問題はどのように打開されるであろうか。そこで, 格付与の不適用 (Non-Application) に関して次の (21) を仮定する。<sup>14)</sup>

- (21) Hypothesis Concerning Non-Application of Case Assignment:  
 (a) Case Arrays of an embd.V and a Complex Verb form a kind of Case Array Union with the Case Array ( \_\_\_ Acc(Dat)).  
 (b) Two (or more than two) non-applications of Case assignment are equal in effect to one actual application.

(21) は, 格付与の不適用に関して embd.V と CV の Case Array が ( \_\_\_ Acc (Dat) ) の Case Array をもつ Union を形成し, 2回(あるいはそれ以上の)不適用が1回の実適用と等価になることを表す。(19a)において, embd.V と CV の Acc 付与は不適用される。(21)によれば, これは Acc 付与に関する1回の実適用と等価となる。結果として, Union Case Array ( \_\_\_ Acc (Dat) ) による主語 NP (Gianni) に対する Dat 付与が可能になる。

## 5. 結語

本稿において, matrix V が受動化されるイタリア語とフランス語の用例に関して若干の考察がなされた。一般の受動態において発動すると考えられる同一指標付け規則 (CRP (A)) と異なり, 同一指標付け規則 (CRP (B)) は言語ごとあるいは, 方言ごとにその適用がパラメーター化される可能性が示された。他のロマンス語(特に, ポルトガル語)における使役構文の例を調査した上で, 本稿で設定された仮説群の修正が必要であることは言うまでもない。

## 註

- (\*) 本稿は, 筆者が日本ロマンス語学会第31回大会(於学習院大学, 1993年5月23日)において行った研究発表(『受動使役構文について—フランス語, イタリア語, スペイン語に関する初歩的考察』)の一部である。その席上, スペイン語の例に関して原誠氏と近松洋男氏より有益なアドバイスをいただいた。なお, スペイン語における受動使役構文に関しては, 石岡(1993b)で報告されている。
- (1) Cano Aguilar (1981)によれば, 次の(i)のように, 他動詞 embd.V の主語 NP に対する受動化用例は非文となる(cf. 石岡(1993b))。
- (i) \*fui hecho traer un regalo 'I was made to bring a present'
- (2) 対応するイタリア語の *Lasciare* 使役構文は基本的にフランス語のそれと同様の挙動を示す

と考えられる（それらの相違点に関しては後述する。イタリア語の *Lasciare* 使役構文と知覚構文の詳細に関しては稿を改める）。フランス語において、*Laisser* 使役構文と知覚構文は基本的に同じ挙動を示すと考えられる。

- (3) Relativized Minimality bar. の定義体系に関しては, Rizzi (1990), Cinque (1990), Ouhalla (1991) 等を参照されたい。
- (4) 任意の最大範疇 (XP) がそれ自身とその主要部 (X) 一致すると前提すると,  $\alpha$  はそれが  $\theta$  統率する範疇  $\beta$  を  $\perp$  標示することになる。
- (5) matrix V (*laiss-*) は Case Array (\_\_\_\_\_ Acc) をもつと考えられる。この場合の対格 (Acc) 付与は隣接性 (Adjacency) の条件を満たす。
- (6) Burzio (1986:p. 229) は, 次の (i) のような知覚構文の例と異なり, 主語 NP (*Giovanni*) が不定法形態の動詞に先行する (7d) のような用例が marginal であると指摘する。  
(i) *Maria ha visto Giovanni riparare la macchina* (Burzio 1986:p. 229)  
'*Maria saw Giovanni repair the car*'  
(7d) がどのような理由で marginal であるかは不明である。
- (7) CV が embd. SPEC (Agr) 位置に移動した目的語 NP (*la macchina*) に Acc を付与するのか,あるいは, 基底生成された位置にある目的語 NP に格を付与するのかが問題となる (これに関しては, 稿を改めて検討する)。
- (8) この格吸収 (Case-Absorption) が発動するプロセスに関しては諸説がある (cf. Baker, Johnson, and Roberts 1989, Jaeggli 1986, Ouhalla 1991)。本稿では, 当該プロセスの考察はなされない。また, Baker (1988) の Government Transparency Corollary (GTC) 適用を制限する方向での議論については, 石岡 (1993b) を参照されたい。
- (9) Burzio (1986) は, embd. AgrP 中の主語 NP が受動化される (i) のようなタイプに関して以下のように言う。  
(i) *Giovanni fu fatto riparare la macchina (=2c)*  
Burzio 1986:p. 307, note 1: "For reasons which remain unclear, this kind of passive is not accepted in French with *faire* and *laisser*, though it is (marginally) with perception predicates like *voir*."  
(10) K 方言と R&V 方言における *Faire/Laisser* 使役構文と知覚構文は同じであると仮定する。
- (11) (16) において, 最大投射 (AspP) が Agr と VP に間に介在するがその表示は省略されている。ここでは, 便宜上 Agr が VP を下位範疇化すると表記することにする (実際には, Agr が AspP を下位範疇化し, Asp が VP を下位範疇化する)。これは, (13) の CRP (A) でも同様である。
- (12) 言うまでもなく, この説明方は使役構文と知覚構文が AgrP 以外の最大範疇を下位範疇化すると仮定する議論にも当てはまる。
- (13) (19b) 中の *da Gianni (by Gianni)* は D 構造において PP として実現されると仮定する。
- (14) Baker, Johnson and Roberts (1989) 流に, CV が Passive Morpheme に Acc を付与すると考えると, 同じ CV による主語 NP (*Gianni*) への Dat 付与が可能になる。しかしながら, この議論は基本的にイタリア語と同様の構造をもつと考えられるスペイン語における *Hacer* 使役構文の挙動を説明できない。(19) に対応するスペイン語の例である (ia, b) で示されるように, イタリア語の場合と異なり, (19b) に対応するスペイン語用例は非文法的と判断される (Cano Aguilar (1981) による)。なお, (ia) の文法性判断は方言ごとに異なっている (詳細は, 石岡 (1993b) を参照されたい)。  
(i) a. \*/?(?) *el coche fue hecho arreglar al mecánico* (Moore 1991:p. 292)  
'*the car was made to be repaired by the mechanic*'  
b. \**Juan fue hecho arreglar el coche*  
'*Juan was made to repair the car*'
- また, Baker, Johnson and Roberts (1989) の問題点については Ouhalla (1999:pp. 91-93)

を参照されたい。

参考文献

- Baker, M. C. (1988). Incorporation: A Theory of Grammatical Function Changing. University of Chicago Press, Chicago, Illinois.
- Baker, M., K. Johnson and I. Roberts (1989). "Passive Arguments Raised." Linguistic Inquiry 20, 219-251.
- Belletti, A. (1990). Generalized Verb Movement. Rosenberg & Selier, Torino.
- Bordelois, I. (1988). "Causatives: From Lexicon to Syntax." Natural Language and Linguistic Theory 6, 57-93.
- Burzio, L. (1986). Italian Syntax: a Government-Binding Approach. Reidel, Dordrecht.
- Cano Aguilar, R. (1981). Estructuras Sintácticas Transitivas en el Español Actual. Gredos, Madrid.
- Chomsky, N. (1986). Barriers. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Cinque, G. (1990). Types of A' Dependencies. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Contreras, H. (1991). "On the Positions of Subjects." Rothstein, S. (ed) Syntax and Semantics 25: Perspectives on Phrase Structure, Heads and Licensing. Academic Press, London.
- Cortés, C. (1992) Issues in Catalan Syntax. Doctoral dissertation, University of California, Los Angeles.
- Finnemann, D. (1982). Aspects of the Spanish Causative Construction. Doctoral dissertation, University of Minnesota.
- Goodall, G. (1987). "Case, Clitics, and Lexical NP's in Romance Causatives." Neidle, C. and Rafael A. Nuñez Cerdeño (eds.) Studies in Romance Languages. Foris, Dordrecht.
- Guasti, M. T. (1991). "Incorporation, Excorporation and Lexical Properties of Causative Heads." The Linguistic Review 8, 209-232.
- Haverkort, M. (1992). "Clitics, Affix Order and the ECP." WCCFL 10, 197-207.
- Jaeggli, O. (1986). "Passives." Linguistic Inquiry 17, 587-622.
- Kayne, R. (1975). French Syntax: the Transformational Cycle. MIT Press, Cambridge (Mass.).
- Kayne, R. (1989). "Facets of Romance Past Participle Agreement." Benicà, P. (ed) Dialect Variation and the Theory of Grammar. Foris, Dordrecht.
- Koopman, H. and D. Sportiche (1991). "The position of Subjects." Lingua 85, 211-258.
- Lois, X. (1990). "Auxiliary Selection and Past Participle Agreement in Romance." Probus 2, 233-255.
- Moore, J. (1991). Reduced Constructions in Spanish. Doctoral dissertation, University of California, Santa Cruz.
- Ouhalla, J. (1991). Functional Categories and Parametric Variation. Routledge, London and New York.
- Quicoli, A. C. (1980). "Clitic Movement in French Causatives." Linguistic Analysis 14.1, 131-185.
- Pearce, E. (1990). Parameters in Old French Syntax: Infinitival Complements. Kluwer, Dordrecht.
- Radford, A. (1979). "Clitics under Causatives in Romance." Journal of Italian Linguistics 4, 137-181.
- Reed, L. (1990a). "Biclausality, Barriers and the French Causative Construction." Cahiers Linguistiques d'Ottawa 18, 79-93.

- Reed, L. (1990b) . "Adjunctions, X<sup>0</sup> Movement, and Verbal Government Chains in French Causatives." MIT Working Papers in Linguistics 12, 161-176.
- Reed, L. (1991) . "The Thematic and Syntactic Structure of French Causatives." Probus 3. 3, 317-360.
- Reed, L. (1992) . "Remarks on Word Order in Causative Constructions." Linguistic Inquiry 23, 164-172.
- Rizzi, L. (1990) . Relativized Minimality. MIT Press, Cambridge (Mass.) .
- Roberts, I. (1991) . "Excorporation and Minimality." Linguistic Inquiry 22.1, 209-218.
- Rouveret, A. and J.-R. Vergnaud (1980) . "Specifying Reference to the Subject: French Causative and Conditions on Representations." Linguistic Inquiry 11, 97-202.
- Sportiche, D. (1988) . "A Theory of Floating Quantifier and Its Corollaries for Constituent Structure." Linguistic Inquiry 19, 33-60.
- Sportiche, D. (1990) . "Movement, Agreement, and Case." Ms., UCLA, Los Angeles, California.
- Strozer, J. (1976) . Clitics in Spanish. Doctoral dissertation, University of California, Los Angeles.
- Subirats-Rüggeberg, C. (1987) . Sentential Complementation in Spanish. John Benjamins, Amsterdam.
- Treviño, E. (1992) . "Subjects in Spanish Causative Constructions." Hirshbühler, P. and K. Koerner (eds). Romance Languages and Modern Linguistic Theory. John Benjamins, Amsterdam.
- Zubizarreta, M. (1986) . "Le Statut Morpho-Syntaxique des Verbes Causatives dans les Langues Romanes." M. Ronat & D. Couquaux (eds.) La Grammaire Modulaire, Les Éditions de Minuit, Paris.
- Zubizarreta, M. (1987) . Levels of Representation in the Lexicon and in the Syntax. Foris, Dordrecht.
- 石岡精三 (1992) . 「フランス語 Faire 使役構文における CM clitics (Case-Marked Clitics) と NCM clitics (Non Case-Marked clitics) の相違について」 長岡技術科学大学『言語・人文科学論集』6号, 71-100.
- 石岡精三 (1993a) . 「Laisser/Faire 使役構文における格付与と Clitic 移動について」『ロマンス語研究』26号, 115-133.
- 石岡精三 (1993b) . 「スペイン語における受動 HACER 使役構文について」 長岡技術科学大学『言語・人文科学論集』7号.